

昔々あるところにイブナシーヤという男の子がいた。彼は父親と2人の姉と1匹の雌山羊と暮らしていた。雌山羊が交尾できる時が来た。そしてそれは、町のスルタン(や有力者)のひとりが持っている雄山羊と行われた。

何月か経って雌山羊は仔山羊を産んだ。スルタンの手下がやって来て、仔山羊を宮殿に連れて行ってしまった。雄山羊は雌山羊を孕ませただけだし、仔山羊はそれで儲けるための所有物だったのに。畑から戻ってきたイブナシーヤは仔山羊がいないの気がついて父親に尋ねた。

「仔山羊はどこ？」。

「スルタンの手下が来て持って行った。彼らの雄山羊が孕ませたということで」。

イブナシーヤは答えた。

「そうか...」。

彼は金曜日、お祈りの日まで待った。皆がお祈りの前に手を洗うために海に行くのに、イブナシーヤは洗濯、それもオムツの洗濯をしに海に行った。イブナシーヤは言われた。

「一体、お前の家で誰が産んだのだい？」。

「父さんが産んだよ」。

「何だって、お前の父親が？」。

「そう、父さんが産んだんだよ」。

彼は、オムツを自分の家に持って帰って広げた。人々はそれをいぶかしげな目つきでじろじろ眺めた。お祈りの時間が来たが、祈りの前にスルタンがイブナシーヤの話を聞きつけ、人々に尋ねた。

「一体、いつから男が産めるようになったのだ？」。

「いやそれが、イブナシーヤがオムツを洗っているところを見たら、彼が、父親が生んだと言い張るもので」。

スルタンはイブナシーヤの家に行き、太陽の下でオムツが乾かされているのを実際に見た。彼は午後まで待ってから、産んだという男に再び会いに行った。彼が着いた時、子供は見え、イブナシーヤの父親が縁側に座っているだけだった。

スルタンは尋ねた。

「お前が産んだという子供はどこだ？」。

イブナシーヤの父親は答えた。

「いかにも、私が産んだことに間違いありません」。

スルタンはそこで16時まで待ち、その頃には大勢の人々が広場に集まってきており、イブナシーヤの父親に、本当だとしたら彼が産んだ子供と来るようにと要求した。イブナシーヤの父親はその時言い返した。

「それでは、あんたが私から取った仔山羊を返してもらおう。何故なら、あんたの雄山羊が産んだのではないことを、あんたは知っているからだ。男は産むことはなく、ただ女だけが生あるものを生み出すのだ」。